

池 皐雨郎 著

かぶら矢 全

東京 自然社 發行



かぶら矢

完

東京自然社發行

100

第 貳 版

俳 趣 と 畫 趣

圖 案 式 俳 句

(全壹冊) 正價貳拾五錢 (郵稅四錢)

『俳句卜小畫ノ趣味、關係、發達、普及、時代並作家ノ評論、現代ノ新聞、雜誌、繪けがき等ノ同觀察。俳句ニ於ケル圖案式ナル一ノ新作法』

東京本郷 自然社發行

岡 野 知 十

著者 晉其角 雨華抱 一、俳 諧風聞 記、等、 等、

插 繪

守武像 抱一筆 松花堂 光悅 立圃 許六 一蝶 蕪村 華山 柳塙臨

東京日本橋 裳華房發賣

100

かぶら矢 完 東京 自然社發行

池 臯雨郎 著

かぶら矢 全

東京 自然社發行

第 貳 版

俳 趣 と 書 趣

圖 案 式 俳 句

(全壹冊) 正價貳拾五錢 (郵稅四錢)

『俳句卜小畫ノ趣味、關係、發達、普及、時代並作家ノ評論、現代ノ新聞、雜誌、繪ばがき等ノ同觀察。俳句ニ於ケル圖案式ナル一ノ新作法』

岡 野 知 十

著者 言其角 雨華抱 一、俳 諧風聞 記、等、

插 繪

守武像 抱一筆 松花堂 光悅 立圓 許六 一蝶 燕村 華山 柳鳩臨

東京本郷 自然社發行

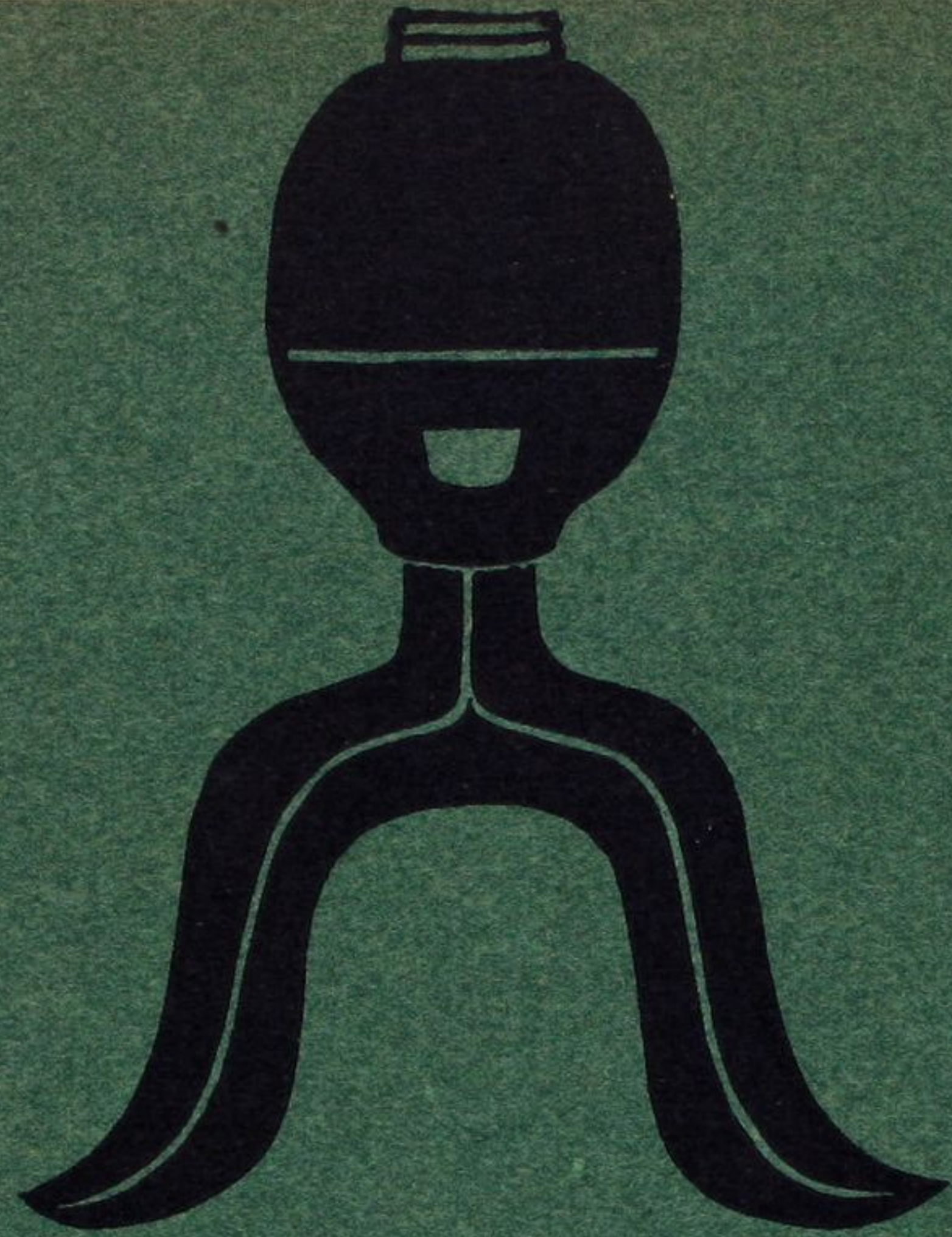
東京日本橋 裳華房發賣



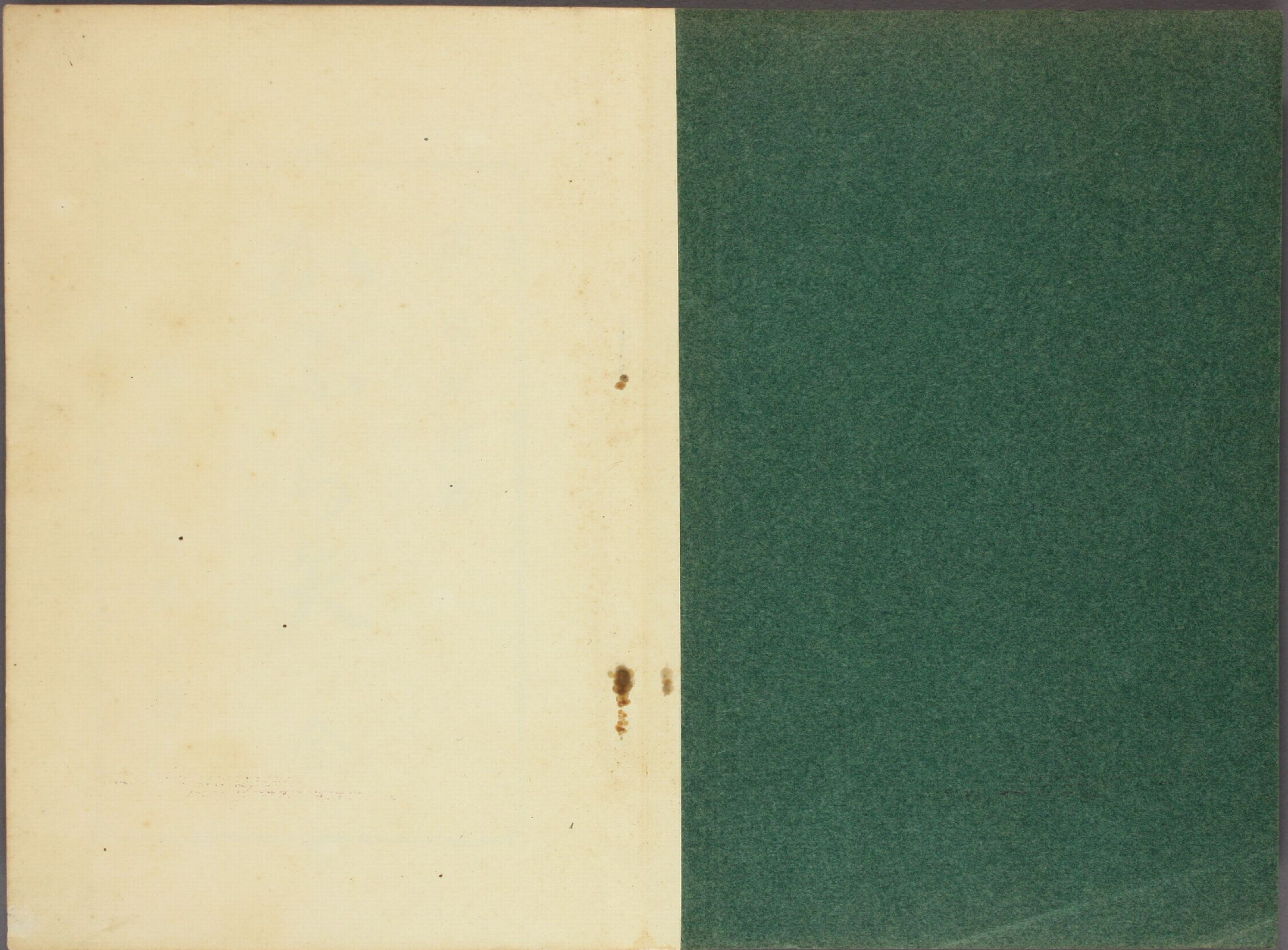
かぶら矢







京 東
社 然 自



池 皐雨郎著

かぶら矢 全

東京 自然社發行



DEDICATED TO
MY FELLOW-WARRIORS
WHO FIGHT
FOR THE CAUSE OF HUMANITY
TO ANNIHILATE
WHATEVER OPPRESSION EXISTS
UNDER THE SUN.

—Koki H. Ike.

TOKIO, SEPTEMBER 5TH 1905.

かぶら矢

目次

函	隻	芙蓉	失	桃	高峰	朧
	眼	の		と	の	
庭	龍	露	題	櫻	曙	夜
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----
四二	三二	二六	二五	一九	五	一

目次

一



DEDICATED TO
 MY FELLOW-WARRIORS
 WHO FIGHT
 FOR THE CAUSE OF HUMANITY
 TO ABOLISH
 WHETHER OPPRESSION EXISTS
 UNDER THE SUN
 — KIM B. PAE —
 NEW YORK: THE SUN, 1942

流	矢	四三
至愛の涙		四九
楓橋夜歸		六五
醉乎笑乎		六六
草露吟		六九
お絹		六三
暗香		九一
放吟一絶		九五
雪中梅		一〇〇
暮角暮笛		一〇五

洞庭波	一〇九
人生の佳味	一一三
秋の歌	一一九
我が情熱	一二六
歳晚幽思	一二八
凱旋門	一三九
小米櫻	一四二
暮雲	一五五

かぶら矢

序歌

天を仰いでダリヨスが
射たる鳴鏑今いづこ、
ヘルレスポイント淺くとも
遺恨は深し二千年
餘韻一縷や憂として。

天目山の春の暮

序歌

武運の窮み遣る瀬なし、
飛ぶや鳴鏑一箭に
孤城落日千載の
恨みを乗せて散る櫻。

* * * * *

嗚呼、人生の修羅場裡
恨み無くてや我れも亦
桑弧蓬矢の晨より
抱く四方の志ざし、

血しほに餒ゆる胸の火や
魔氣の悶えの遣り難く
一夜幽夢に襲はれて
起つて射放つ黒羽箭、
その反響の鳴るところ
無間地獄か天城か。

乙巳歲初秋

司馬天閣主人識

かぶら矢

池 皐雨郎 著

朧 夜

姉はピアノに妹子は
十三絃の琴の緒に
調べ合はせて餘念なし、
月高欄に傾むきて
夢おぼろ夜も静かなり。

朧 夜

音鍵に轉ずる無我が韻、
 琴柱に咽ぶ無私の聲、
 ピヤノは姉の氣高さに
 琴は妹子の優しさに
 且つ似通ひて興深し。

一曲已んで春の夜の
 霞に迷ふ餘音や、
 彼れを怒濤に比ぶれば

此は幽溪のさゞれ水、
 是れを雲雀に譬ふれば
 其よ桐林の破雲鳳、
 趣味はピヤノに限られぬ、
 惜しむべきかな亡國の
 悲愁を帯びて遣る瀬なき
 痛みを漏らす琴の音よ。
 來れ妹子、今暫し
 汝が其の琴をか遣りつ

姉もろともに、夜と共に、
 弾け、且つ歌へ、ピヤニシモ、
 ピヤノフォルテの拘泥なく
 思ふがまゝに興ぜかし、
 天地自由や無我無念
 其の雄渾の氣に觸れて
 我が此の胸も震ふまで
 月の朧も晴るゝまで。

高峰の曙

榛名湖畔漫吟

水遠山高天一涯。

清眠忘俗亦忘飢。

蟲韻蟬吟情尤好。

心托浮雲任所之。

獨り高峰に登り來て
 光りを慕ふ朝ぼらけ
 横雲遠く棚引きさて
 麓の里は夢深し。

俗を離るゝ五千尺
 天は頭に近けれど
 思へば卑し塵の世の
 縁に引かるゝ我が心
 そゞろむら立つ朝霧の
 絶え間に浮ぶ友の影
 さのふ別れし故郷や
 愛する人の影ゆかし。

戀よ、情よ、さるにても
 眞の道の埋もれて
 麻は跡なき蓬生の
 曲れる人の世の末や。

國の興廢、身の浮沈、
 慾の戦かひ休む間なく、
 萌ゆる若草、桐一と葉、
 無常のあらし最ときびし。

身を飛ぶ鳥に任かせても
星照る天の世に往きて
今を昔しを忘れんと
乞ひ仰ふぎてし幾歳か。

夕べ、杜鵑の聲を愛で
朝、黄鳥の音を聞きて
しばし夏ひを擲げうてば
猶ほ立ち返へる憂き愁ひ。

人をつれなく、世を辛らく、
恨むとしもは無けれども
かの亂れ藻に棲む虫の
たゞわれからの心かや。

湖水に寫る大空の
濶き意を窺がひて
萬朶の花の匂ひある
世の趣むきを思へかし。

高く離れて唯だ獨り
浮べる雲よ心あらば
汝が昇り行く天上の
その秘め事を漏らさずや。

やよ瀧川よ汝れも亦
何處の極に那處より
流れ来て且つ去る如く
人の運命を語らずや。

嘆くを休めよ我が心
夢果てしなき緒を断ちつ、
谷を隔てゝ唄ひ行く
かの牧童の聲を聲け。

牧謠「こゝろ細さに
出て山見れば
雲のかゝらぬ
山は無。」

父ちちに追おはれて

牛うし追おひ行ゆけば

憎にくくや狭さ霧きりが

立たちかくす。」

母ははさいとしや

北きた山やま越こえて

待まちてど歸かへらぬ

里さとがへり。

西にしは大おほ嶽たけ

ひがしは小こ坂さか

中なかの細ほそ野ので

牛うしを追おふ。

聲こゑ飾かざりなき一ひとと節せしも

奇くしき小こ琴ごの音ねに鳴なるや、

餘よ韻いんかすかに谷たに深ふかさ

霧きりのまぎれに隠かくれ行ゆく。

銀燭^{ぎんしよく} 冴^さゆる 玉樓^{ぎよくろう} の
 榮華^{えいごわ} の 影^{かげ} も 身^み に 知^し ら ず、
 春^{はる} う ら 若^{わか} さ 處^{おとめ} 女^め 子^こ の
 戀^{こひ} の 句^は ひ は 猶^{なほ} ほ 更^{さら} ら に。

草^{くさ} に 生^う れ て 草^{くさ} に 伏^ふ し
 筐^{かご} の 小^こ 鞭^{むち} に 牛^{うし} 追^お ひ て
 待^{まち} て ど 歸^か へ ら ぬ 母^{はは} 待^{まち} つ と
 唄^{うた} ふ 童^{わらべ} の 罪^{つみ} 無^な さ よ。

我^わ れ も 嘆^{なげ} き の 霧^{きり} 深^{ふか} さ
 天^{あま} と 地^{つち} と の 間^{あひだ} な る
 こゝろ 細^{ほそ} 野^の に 彷徨^{さす} ら ひ て
 う し や 浮^{うき} 世^よ の 牛^{うし} を 追^お ふ。

人^{ひと} の 偽^{いつはり} は り、 世^よ の 非^ひ 道^{どう}、
 あ や め も 分^わ か ず 搔^か き 曇^{くも} る
 酸^{さん} 風^{ふう} 辛^{しん} 雨^う 絶^た え ざ れ ば
 笠^{かさ} も 破^{やぶ} れ つ 簣^み も 朽^く つ。

泣きて渡るも浮世なり、
 笑つて越すも浮世なり、
 いづれ追ふべき道ならば
 行けや、いそしく、潔きよく。

かくて無明の霧晴れて
 かの隠れ家に歸へる時
 父と楽しく爐り火の
 もとに過さん長さ夜を。

見よ山鳥むら立ちて
 岬を出づる東明や、
 谷の黄鳥諸ごゑに
 朝の調べを歌ふなる。

高く聳ゆる萬嶽の
 峰に輝やく朝日影、
 空なごりなく打ち晴れて
 塵一點の雲も無し。

紅き、ひらさき、濃き、薄き、

千草亂るゝ花の色、

碧漫々と湛へたる

湖水に落つる鷺の影。

世を麻糸のうみ果てゝ

佗ぶてふ友よ疾く立ちて

登れ高峰に明けぼのゝ

此の壯觀を興すべく。

桃と櫻

標註

『佛國革命の時、ヂャコピン黨巨魁マラー専斷横恣甚だしく終に自由の大義を濫るに至る、僻村カンの一少女シヤロット、コロデー憤慨措かず、短刀を以て之を刺し能く之を斃す、身亦捕らへられて斷領臺上に刑せらる、時に芳紀正に二十三。(ラマルチン佛國革命黨史參照)

ウエラ、サシユリツチは舊露都モスコ一の少女なり、カザン大學生の壓制政府に反抗して義擧を企つるや、時の警視總監トレポフ、之れを驅つて殘虐餘す處なく、追放斬首相踵で責むること甚はだ急な

り、義骨の少女終に忍んで傍觀する能はず、一夕拳銃を以てトレボッフ將軍を狙撃し、立ち處に捕へられてシベリヤの野に斬らる、時に妙齡漸く十九。兩女共に絶世の美人なりきと傳へらる、(エンサイクロペデア、ブリタニカ増補版ソシアリズムの一篇參照)

散るを惜しまぬ潔よさに

匂ふ櫻の愛づべくは

あゝコロデーは其の花よ、

色濃やかに温かき

桃の風情の戀ふべくは

少女ウエラは其の蕾

いづれ無情の運命の

手に手折られて可憐しう

散りし名残も戀無常

悲歌調は高し「マルセイユ」

湧き返へりたる革命の

潮あらしに散るよ哀れ、

さもあらばあれ紅淋漓

斷頭臺に濺ぎつる

汝が若き血の滴たりは
流れ流れてフランスの
罪惡の天地を洗ひてき、
嗚呼、なつかしのシャロット、
戀ひし、コロデー、なつかしや。

ウラル風おろしの吹き荒れて
カザンおとに起る義の叫び
其の反響はんきやうに散るよ哀れ、
さもあらばあれ鬼啾々しゅうしゅう

シベリヤの野に晒らしてし
汝が織骨おほねは虞無黨よむとうの
立つる自由じゆの太柱たいちゆう
その基礎いしぞえを固めてき、
嗚呼、最と惜をしのサシユリツチ
ウエラ少女おとめよ、我が戀よ。

桃と櫻の花二た枝え
両手に持ちて乞ふらくは
自由じゆの霞かすみたなびける

ス イ ツ ル あ た り 菅 の 根 の
 長 き 日 ぐ ら し 憧 が れ て
 晴 れ の 遊 山 が 爲 て 見 た や。

失 題

ヴィクトル、ユゴ

長 空 萬 里 凌 ぎ 來 て
 し ば し 休 ら ふ 枝 脆 く
 折 れ な ん と す れ ど 且 つ 歌 ふ
 鳥 の 心 を 知 れ よ 君、
 頼 母 し か ら ず や
 其 の 翼。

芙蓉の露

(舊作)

味氣なき世を厭ひ侘び
 ととも死なんと幾そ度
 水に臨めば母の影
 刃を取れば父の影
 おぼろくに浮び来て
 さすが我が身の捨て難き
 空飛ぶ鳥や行く流水
 はた心無き夕雲の

何を其の身の力にて
 この天地を渡るらん。

春は外山に憧がれて
 誘ふ落花の風に泣き、
 秋は末野に彷徨ひて
 露華寒蛩に魂を断つ、
 日居また月諸幾鼎々、
 二十五年を夢と経て
 持て餘しぬる五尺あまり

六尺足らぬ身一貫

星より星の空遠く
仰げば廣し天の原、
波また彼の底深く
思へば深し和田つ海、
いづれ涯なき太虚を
針の耳孔に透し見て
我と僻むる我が心、
人を情なく世を辛らく

身を將た憂しと見ることも
唯だ慾深き我が儘の
狭き意の迷ひかや。

往て芙蓉の露に見よ、
榮華くらべん人の世の
綾も錦も物ならず、
東雲まださ池の面の
水風清く渡るとき
誰れか静思の眼を閉ぢて

遠く無限を思はざる、
花ひと時に先きだちて
散る露にすら悠久の
榮えを誇る力あり。

露に小鳥に行く水に
無心の雲に力あり
頼む無限の生命あり、
人てふ人は我を棄て
友皆な我れを忘るとも

など顧慮ん大空は
はるく遠く且つ濶し、
人ひと時や夢の世に
我れと我が身を苦しめて
あだに生命を疎むべき、
露に小鳥に行く水に
雲に我が身に力あり
頼む無限の生命あり。

はるくとはてしもあらぬ大空の
ひろきを人のこゝろともがな

隻眼龍

序文

佛蘭士大統領ガンベッタ幼時送られて佛都某小學に遊ぶ、教頭頑迷其の鞭撻頗る意に満たざる者あり。彼れ鬱悶遣らん方なく書を飛ばして郷里の阿爺に乞ふて曰く、願はくは兒をして他校に移らしめよ、然らざれば兒は一眼を刳り捨てんと。阿爺其の驕激を笑つて敢て顧みず、懇ろに其の非を諭す。ガンベッタ即ち怒つて一眼を抉出し、重ねて書を寄せて阿爺の膽を奪ふ、曰く、言聽かれず、而も兒が意志や鍊鐵の強きよりも強し、愈よ聽かれずんば更に兩眼を刳り捨てんと。阿爺驚倒直ちに其の乞を容る。嘆

じて曰く、此の硬頂兒と。健なる哉其の意氣、嗚呼雀舞他年、彼れをして一眼以て三百の頭腦を睥睨し能く議會を操縦し、能く共和國民の元精を掀翻せしめたる者、源流遠く隻眼抉出の一轉機に存する無からんや。彼の硬頂兒、此の好丈夫、想見追慕、忽として爲めに一詩あり。

其の一

兒、「三度諫めて聽かざれば
腹切る武士も在りと聞く、
虎と狙らへば石に立つ

矢もありきとか手束弓
鳴絃高き放れ矢の
逝きて返へらぬ見が言や。

片眼の血しほ滴たりて
書く文既に紅淋漓
見が赤心も見えつべし、
父よ再び聴かれずば
残る片眼も刳り捨てん
見は唯だ意氣を云ふ者を。

浩然の意氣沮まれて
自由の天地を見るなくば
两眼あるも何かせん
若かず盲魚と身を爲して
悠游自適マンモスの
太古の洞に狂ふべく。

父、「此の言あるか硬頂見
汝が乞強て聴かれたり

行けや磊落意の如く、
唯だ心せよ好寵兒
人生行路啻ならず
百難踵ぐに百危あり。

一指一髪おのづから
天の活機のあるものを
驕激事を誤まりて
一期の悔を爲す勿れ、
あと硬頂見、好寵兒、

汝、自から重んぜよ。

革命の雲今急に
民愁轉た安からず
舉國期し持つ意氣の人、
我れ唯だ祈るガンベッタ
父を服せし汝が意氣の
更に天下を服すべく。

其の二

戦呼亂れてプロイスの
旗風颯と吹き捲くや
鳥江一敗驩逝かず、
嗚呼、驩逝かず英雄の
末路さこそは恨深き。

パリスの都城圍まれて
唯だ聞く四面楚歌の聲
落月慘憺光り無く
アルピンの頭傾むさぬ、

ラインの川の瀬枕に
憤死の曲の響く時
見よモルトケやビスマルク
得意の枕高かりき。

物究はまれば且つ通ず
誰れか思はん怪翁の
瓢駒の術や軽氣球
惜しむ残軀の覇を載せて
危機一髪に三軍の

圍み脱るゝ夜五更。

飄々として浮び去る

萬仞高き雲の上

思へば夢か人の身は

帝運須臾に消え失せつ

早や天囚の此の孤心、

數行落つる雁金や

一眼の涙滙さあへず、

さもあらばあれ空の空

古今興亡將た浮沈

榮枯退達皆な虚なり、

豁然として長嘯し

毒氣を吹いて人生の

大愚を笑ふ空の夜や、

嗚呼隻眼の硬頂兒

その悪戯は底事ぞ。

函庭

自然の鑿に刻まれて
 天そとりに立つ富士の峯
 萬古の美術雪清く、
 船まばらなる東海の
 波間を縫へる三保が原
 松青千里塵うとき、
 あゝ月宮の女神の
 眼を慰さむる函庭や。

流矢

海に臨める高殿の
 簾を漏るゝマンダリン、
 そよ吹く風に運ばれて
 波に漂よふ音ゆかし。

沖の漁火、大空の
 星影ともに疎らにて
 波の調べも更くる夜を

爪音わけて朗かなり。

汀づたひに此の夕べ

鬢は緑りに、脛白う、

心清さも然ぞとのみ、

見初めし妹が手すざびか。

戀を嘆つか、世を泣くか、

そも將た何の物思ひ、

絲の亂れのほろくくと

悲調身に入む合の手や。

故國破れて幾歳か

志士の憂ひの休み難く

イタリヤの波幾度か

革命來を唱へけん。

ローマの舊都今いかに、

シーザルの夢荒れ寥びて

殘碑空しき叢むらに

啾くや蟲のマンダリン。

榮枯盛衰おのづから
運命の史に書かれたり、
勝に誇れる國民の
未來は暫し問ふ勿れ。

唯れか優しき少女の
手には任せしマンダリン、
世に不遇なる身は奈で

聞くに堪へんや其の悲曲。

嗚呼、狂嵐よ吹き起れ、
夜すがら吹いて夢淡き
少女の戀や亡國の
調べの絃を亂れかし。

來れ、怒濤よ立ち返へれ、
逆捲き寄せて我が胸に
はしなく受けし流れ矢の

深き傷手を洗へかし。

至愛の涙

遍ねく耳を今昔の
 偉人の聲に傾むけつ
 廣く眼を東西の
 詩書萬卷に晒らせども
 徳なほ足らず意志弱く
 膽力鈍ぶき甲斐無さに
 頼母しからぬ男どと
 我れを泣くこそわり無けれ。

あはれ我が妻しばしだに
 かの大空を仰ぎても
 苦き涙を拭へかし、
 誰れか能く知る我れを措きて
 潔き氣高き汝が心、
 人の位は世の富は
 汝れに向ひて力なく
 汝れを誘なふよすが無し。

三尺高き木の空に
 よしや首は懸くるとも
 名も無き野べの下草に
 よしや屍は曝らすとも
 殊勝に汝れはほゝゑみて
 我を送ると我れは知る、
 まこと義の爲め道の爲め
 將たまた仁の爲めならば。

將^ばたまた主義^{しゆぎ}の爲^ためならば
 我^われを慰^{なぐ}さめ勵^{ほけ}まして
 勇^{いさ}むと汝^なれを疑^{うた}がはず、
 破^{やぶ}れ紙^{かみ}子^こに破^{やぶ}れ笠^{かさ}
 夜^や盗^{とう}鼠^そ賊^{ぞく}と罵^{のの}しられ
 諛^そり、嘲^{あざけ}り、辱^{はづ}かしめ、
 呪^{のろ}咀^ひは雨^{あめ}と降^ふるとても。
 春^{はる}は櫻^{さくら}花^{はな}の影^{かげ}汲^くみて
 世^よの酒^{さか}杯^{づき}の回^{めぐ}る時^{とき}、

秋^{あき}は桂^{かつら}の里^{さと}遠^{とほ}く
 月^{つき}に絲^し竹^{ちく}の響^{ひび}く時^{とき}、
 淋^{さび}しく疎^{うと}く世^よ離^{はな}れて
 汝^なが清^{たの}樂^{しみ}は人^{ひと}知^しれぬ
 情^{なさけ}に見^み舞^まふ孤^{みなしこ}兒^こや
 病^やめる寡^{やもめ}婦^めの門^{かど}にあり。
 華^{くわ}燭^{しよく}の影^{かげ}に蓬^{ほう}萊^{らい}の
 夢^{ゆめ}を現^{うつ}實^{じつ}と見^みてしより
 既^{すで}に重^{かさ}ぬる幾^{いく}月^{つき}日^ひ、

洗ふに似たる貧しさに
家に藏めず五斗の米
四朱の備へも無けれども
優しき微笑は汝が頬に
ゆかしき愛は汝が胸に
生ける泉と溢れたり。

我れに仕ふる心づくし、
我れを慕へる汝が眞實、
はた我が友はおし並べて

あはれ鬼才と我れを呼ぶ、
然はあれども意志弱く
情に脆く斯くてあらば
頼母しからぬ男ぞと
我を泣くこそ是非なけれ。

朝立ち登る峰の雲
夕べは落つる野路の雨、
あるは果敢なき朝霜の
柱に似たる志ざし、

斷臂九年は且つ云はず
軒の蜘蛛手の絲に見て
我れと我が身を思ふにも
我れ將た我れを耻づるかな。

斷ちたる機に千載の
名を織り留めし賢母あり、
匹婦の苦言六國の
印を結びし例しあり、
鑄びたる骨に油さし

志の駒に秣かひ
渴き果てたる魂しひを
うるほすものや汝が涙

千里に友を送る時、
門に遊子を望むとき、
知られぬ戀を泣く處、
他人の憂ひを負ふところ、
病める寵兒の枕べに、
老いたる父の膝下に、

熱き涙痕の数はあれど
我が身に沁みていとしさの
勝るゝや此の一と雫。

石に立つなる征矢の根も、
岩を切るなる太刀の刃も、
十字諸刃の槍の穂も、
毒婦の舌の切尖も、
讒誣の筆の戟尖も、
我れには並べて物ならず

たゞ防ぎなく痛ましく
深く鋭く胸板を
貫ぬくや此の一と雫。

頼母しからぬ男どと
我れを泣く汝が頼母しさ、
滄浪萬里うつせみの
世は幻ろしと観じつゝ
粟あぢきなき一炊の
夢と捨てたる身を責めて

無念の涙やる瀬なく
再たび茲に青雲や
天とこしへに且つ高き
希望の火をぞ燃やしたる。

明日とも云はじ今日今宵
汝が其の涙痕干ざる間に
我が此の火焰消えぬ間に
思ひたちぬる旅衣
行くては定かならねども

しばし世に憂き別れ路に
鴛鴦の袂を分つべし、
草も木も知れ土も知れ
我が志ざし成る日まで
またの逢ふ瀬は契るまじ。

運拙なくて世の坂の
嶮はしき谷に落つるとも、
驟嵐怒潮さかまきて
世渡る舵は絶ゆるとも、

友は舉りて我れを捨て
世は皆な我れに背くとも、
天に眞理の光りあり、
地には自由の力あり、
無限の生命我れにあり。

ころも片しく手枕に
志ば鳴く千鳥聞く時は、
船路に我れを思へかし、
木枯らし荒さむ聞の戸に

北山しぐれ降る頃は
我れを山路に偲べかし、
庭の白萩しら梅の
露を匂ひを慕ふにも
わりなく我れを忘るなよ。

吾が妻、さらば、いざ然らば
今日思ひ立つ手束杖
旅の門出を急ぐべし、
丈夫無念の夢幾夜

徳成り名成り功成りて
げに頼母しき男ぞと
嬉しく我れを泣く日まで
まばしは惜しめ其の涙
その温かさひと雫

楓橋夜歸

(戲翻楓橋夜泊)

楓橋旗亭月斜め
夜烏啼き休んで霜白し、
客愁今宵幾ばくぞ
漁火亂點す波の上、
人生夢か一酔の
微醺を帯びて蹠跟と
老僧歸へる寒山寺
夜半の鐘を撞かんとや。

醉乎笑乎

祝すべきかな革命の
機運に逢へる大御代は
膺懲伐露の慶事あり。

琵琶の湖水に蘭陵の
美酒を湛へていざ然らば
祝大杯に酔はなんか。

嗚呼、待て暫し世には猶ほ
人道自由の義を知らず

『平等』の聲に太息つき
『革命』の字に目眩めさ
うろたへ騒ぐ輩あり。

之れをお蝶蛙に較ふべし、
目前も見えず狼狽へて
巨燭を襲ふ態たらく
能なく智なく意氣地なく

人に噛みつく藝もなし。

好し、然らば我れ太平の

無爲に苦しむ眠氣ざまし

かの虻蚘の子の鼻の穴に

艾の燻り嗅かして

しばし浮世を笑はん乎。

草露吟

作州駒返峠頭卒賦

千草に宿る露の玉

色は千種に變はれども

落つれば同じ水の精

天に上りて結ぼれて

また降り來れば玉ゆらの

草の宿りの露なれや。

花に宿れば紅るに、
 柳の夫れの緑りなる、
 小萩に添へば愛せられ、
 蘇に寄れば疎まるゝ、
 たゞ是れ露の置きどころ
 妍醜餘す幾時ぞ
 解くれば元の水の精。
 太虚に充てる靈の精

露と亂れて幾かへり
 解けては結び結びては
 萌え且つ枯るゝ人の身に
 假りの宿りを定むらん。
 將た是れ魂の置きどころ、
 或るは時めく花のごと、
 あるは萎るゝ草のごと、
 貴賤、貧富、正よ、邪よ、
 品は千種に變はれども

賢^{けん}愚^ぐ世^よに經^よる幾^{いく}時^{とき}ぞ
解^とくれば同^{おな}じ精^{せい}なれや。

お絹

詩神

「傷^{いた}はしや、お絹^{きぬ}、
野^のに白^さ百合^{ゆり}あり、
揚^あ羽^はの胡^こ蝶^{てつ}、
揚^あげ雲^ひ雀^{ばり}、
いづれ自^じ由^ゆの露^{つゆ}に醉^よふ、
あしお絹^{きぬ}、
何^{なに}とて身^みをば賣^うりつるぞ。」

お絹

「賣りたるならず賣られたり、
 董、白百合、さぞ在らん
 身は名無し野の捨草よ、
 胡蝶雲雀も然ぞあらん
 我れは浮巢の鴉鳥の
 泥の深水に浮き沈む。」

詩神

「苦しがるらし辛らからし

お絹

あゝお絹
 我れ唯だ思ひやるぞかし。」

「耻かしや、

唯だあきらめにあきらめて
 夜毎に結ぶ魔の夢も
 馴れての今は辛らからず。」

詩神

「暫らく許せ、やよお絹
汝れに思ひの歌あらば
その一と節を漏らせかし。」

(お絹無邪氣に唄ふ)

『さ夜ふけて』

さ夜ふけて

ひとり脱け出し

閨の外、

見れば牙えたる

大空に

身の瘦せ見する

ねまき姿の月の影、

肌寒う

宵に過ごせし

笹の香も

醒めては胸が

痛むぞへ。』

『皇國のおん爲め』

門出して

兄は今ごろ

沙河あたり、

乙の舎弟は

貫らはれて

北の海べの

漁なとり、

生れて父の

顔も見ず、

母は寒さに

中てられて

この冬ごもり

病むとやら。』

詩神

「あゝ、あゝ、お絹。」

(お絹且つ唄ふ)

『戀すれば

戀すれば

世間知らずと

『戀も眞實も
 なに樂しみの何あるふ、
 まよ浮世もあることか、
 身幅比らべんすねて寝て
 夜衣の袖、
 翫らるゝ。』

伊達に袖ふる 嘲けられ
 張りも通しつ 戀郎、
 またのひと夜を すねもしつ
 心中立てすりや 解けてねて
 性悪るな
 みそかの月と

廣き世界も

廣からで

頼るは枕

たゞ一とつ、

泣く人見れば

ほゝゑまれ

笑ふを見れば

泣かざるし。』

詩神

「趣味あり、詩あり、涙あり、
あゝ、あゝ、お絹、汝が父は
去つて自然に歸へりしも
自然の父はとこしへに
汝れを羽ぐゝみ育つべし。」

お絹

「ホ、珍らしや我が身をか。」

詩神

「汝が身を思へ紫の
 ゆかりなつかし戀ごろも
 その織肌よ、その眉目よ、
 汝れに對へば玉樓の
 銀燭などか榮えあらん、
 汝れに歌あり、情あり、
 惜しむに餘る心ばえ、
 あゝお絹、あゝお絹
 何とて身をば救はざる。」

「救はざるとは謂はれなし、
 救はれざるを何とせん。」

よし、救はれなば汝れは亦
 何とかすらん先づ語れ。」

「あゝ我れ知らず浪まくら

なにと鳴尾の捨舟の
世渡る途は我れ知らず。

(お絹暫らく黙す、詩神また敢て云はず)

あゝたまさかに救はれて
苦海を出なば何とせん、

あゝ何とせん

夫れよ

思ひつきたり其の時は

喉の調べや糸竹の

業を覚えて身をも立て

名を改めて、舞姫の
裡よ、浅間の夕煙り
風のまに、遠ち近ちと。

詩神

「なびかんと云ふか、

あゝ、憐れ

げにや蓼喰ふ虫の心、

また居は心を移す習ひ、

身の憂きふしに比らべては

汝が眼に映つる舞姫の
 羨やましくも見えぬるか、
 頰魄重ねて圓ならず
 一度び落ちし露の玉
 誰れかは舊に復へし得ん。

(詩神泣く、お絹頭を低れて敢て云はず)

あゝお絹

我れには救ふ力なし、
 救ひ難きを如何にせん、
 理想の夢路吹き亂る

魔の劫風か現し世の
 うつゝの惑ひ是非もなし、
 たゞ其の儘に恙なう
 身を勞はりて暮らせかし。

(お絹嘆息す、詩神暫らく黙す)

あゝお絹、あゝお絹、

責めては惜しむ心盡し
 ふびんの念ひ止み難く
 我れ今日今宵汝が許に
 意氣凜乎たる丈夫の

情知れるを送るべし、
 契れ一夜の鴛鴦ぶすま
 夢飽くまでも温かく
 其の魂しひの香に酔ひて
 しばらく憂さを慰さめよ、
 戀の真味や人生の
 自由の意氣も覺れかし。」

(詩神消え去る、お絹獨り泣く)

暗香

寄不眠子 舊作

去歳や昨日と思ひてし
 月日流れて行く水に
 梅花七たび浮び散り
 結ぶに辛らき夢の世を
 春は八たびも廻り來ぬ。
 君と二人の友と我れ

八つの袂を聯らねつゝ
霞の空にあこがれし
其の夜、其の月、其の梅の
句ひを今ぞ忍ぶなる。

歸へる雁がね、來る燕、
かくて別れて君は北
我れは南の島つどり
翅はるかに隔てつゝ
幾その春か送りけん。

浪風あらし世の船路
凄く嶮はしき人ごゝろ
知りての後に最とゞ猶ほ
身にしみくと戀しきは
その夜の梅の句ひかな。
世の八衢に漂らひて
我れ迷ひあり、憂ひあり、
仰ぎ知らばや潔ぎよき

二人の友と將た君の
ともに抱ける志ざし。

梅が香高しいざ然らば
月おぼろ夜の花陰に
心會ひたる友四たり
八つの袂を合はせつゝ
八とせの昔し語らばや。

おぼろ夜の梅の木かげに世を泣きし
こそぞ我が身ぞ今はこひしき

放吟一絶

歌ふを休めよ大和民族、

『花はさくら樹』

人は武士

旅は道連れ

世は情』

其の調何ぞ智慧淺き、

見よ時と代は移りたり

蟄龍やがて躍り出でゝ

大瀛の波に狂ふべく。

我れは櫻は嫌ひなり

その花何ぞ猥りなる、

人また武士に效らはんや、

封建の代の夜迷言、

憐れむべしやお武家衆

霸氣に酔ひたる將軍の

お刀掛けに外ならず。

我れに理想の島根あり、

大和か、あらず、敷島か、

否、否、あらず、地中海

エトナの火焰咽ぶところ

ハニバルの息迷ふほとり、

天に平等の星亂れ

岸に自由の波躍る、

名は萬代の史に垂れて

人は呼ぶなりコルシカと。

我れまた愛す鐵骨の
 香は芳ばしき梅の花、
 好文の雅は且つ云はず、
 疎影暗香時ありて
 我れをし撃てば我れながら
 我れを忘るゝ幾度か、
 いざ然らば聞け大和民族
 我が愛で歌ふ一節を、
 『人はコルシカ
 花は梅』

民は平等

世は自由。

自註、「地中海頭屢々烈風起り濃塵天を捲いて日色を
 奪ふことあり、人之れをアフリカの沙漠風と稱す。
 余の眼中にアフリカなる者なし、唯だ其烈風吹き來
 る國に於て曾て絶代の英雄ハニバルありしを知るの
 み、故に之れをハニバルの息と云ふ、詩中及之」

雪中梅

さる頃、世を傷む心の盛りなりけることありて、
さる檢校を語りひ、「明石」の調べに合はせて歌はせ
たる琴歌、

一段

世のなかは 物變はり
星移れども 花に風
月にむら雲 晴れやらぬ
心づくしの 夢なれや。

二段

つくくと 味氣なく
世をうぐひすの 音に侘びて
恨みは果てじ なか／＼に
うれしき春も あるぞとよ。

三段

ふりつもる 白妙は
梢に辛らき 夜半の雲
こゝろ撓ゆまぬ 哀れさは

句こひゆかしきしらうめ。

四段

色いろをも香かをも君きみならで

誰たれにか見みせん梅うめの花はな

つゝむ涙なみだは人ひと知らで

げに淺あさからぬ物もの思おもひ。

五段

わが身み一ひととつに降ふりかゝる

吹ふ雲ぐもあらしは辛つらくとも
浮うき世よを廻めぐる小車こぐるまの
みち一ひととすぢに忍しのばゞや。

六段

けさ吹ふきわたる春はるかぜに

かをる園生ちゑの梅うめが香かや

鳴なく黄鳥おうひすものどかなる

千代ちよの契ちぎりのめてたさよ。

暮角暮笛

泉清らに森青く
 春てふ慈母のふところに
 萌ゆる若草ねよげなり、
 羊の群の是處かしこ
 こゝろ廣野に放たれて
 霞の裳に縋れ行く、
 やがて響くや牧の子の
 その呼聲の音も低う

野越え山越え谷越えて
 夕告げわたる角の笛。

其の聲悲し、調淋し、
 天を逐はれて地に落ちて
 自由を亂る魔の笛か、
 憐れむ、群の小羊よ、
 歸へれ今宵は汝が檻に
 束縛の手は辛らくとも
 忍んで眠れ春一夜

明日の自由を夢見つゝ。

* * * * *

終歳絶えて日も照らず

地獄に通ふトンネルか、

射利の筈にエンヂンの

狂ふ前後は血の池よ、

劔の山や火の泉、

見よ齒車の逆落し、

右に左りに馳せちがふ

人間らしからぬ人間の顔

汗に埃に塗れたる、
さても響くや夕暮の
空真二つに劈きて
鳴り迸しる蒸気笛。

其の聲凄し、潔ぎよし、
サタンを伐ちし天軍の
凱歌告ぐる鐵笛か、
かへれ、率ざく勇ましき
労働の子よ疾く歸へれ

妻子待つらん汝が家に、
家無きは縄暖簾
潜つて仰ふげ酒三斗
自由、平等、舌鼓み
白馬も意馬も躍るまで。

洞庭波

(舊作)

飄温飛卿贈少年行

江○海○相○遇○客○恨○多○
酒○酣○夜○別○淮○陰○市○
秋○風○葉○下○洞○庭○波○
月○照○高○樓○一○曲○歌○

浮世の海にみなれ棹
さし初めしより友船の
か行きかく行き楫まくら
交互に結ぶ憂き夢や
せまさ袂に包みあへぬ

旅の哀れぞ多かりき。

いづこも同じ音づれに

おどろかれぬる淋しさも

わけて身にしむ浦風や

雨と亂れてほろくくと

木の葉こぼるゝ洞庭の

波のうねうね秋ふかし。

とまるも往くも時節にて

こゝに別るゝ淮陰や
そゞろ更けゆく夜もすがら
さしつさゝるゝ酒杯の
數まだ盡さず盡さやらぬ
名残を暫し惜しむなり。

歌ひ催ほすひと曲も
機に適ひて最ど猶ほ
音じめ床しき高樓や
欄干遠く照る月の

物思はする影ともに
絃の調べど澄みまさる。

人生の佳味

一と日ひねもす都路を
めぐり盡して往きつ來つ
いかに賣らずや賣れ我れに
我れに『自由』を與へよと
聲の限りに呼ばひしが
賣り得る者はあらざりき。

あな宜しこそ、連城の

珠も巨萬の黄金も
 いかでか及かん
 估價無限、
 萬古理想の花に宿る
 自由の露の一滴に
 夜光不滅の其の玉に。

一と日はしなく里はづれ
 病める乞食に出遇ひしが
 彼れ物乞はず、物云はず、
 たゞ骨高き手を舉げて

迢けき方を指さしぬ。

彼れ狂ならず、啞ならず、
 見よ怪しげに打ち震ふ
 指頭おのづから字を爲して
 且つ句を爲して遣る瀬なき
 悲歌憤世の氣や漏らす
 深き思ひの讀まるゝを。

『うさゝ小川の』

さゞれ水

うねりく／＼て

行くところ、

孤軒秋暮れて

松雨蕭、

鹿鳴遠近

山水幽、

そこに自由の

天地あり。

行け、行きて見よ

自由郷、

櫓に燻ぶる

銀髪の

老爺を

さしまねき

自在に懸けし

薬罐の湯

そゝぐ心も

温かく

澁茶一椀

進ずべし。

仁義、朴訥、

無我、無慾、

人生の佳味

這裏に在り。』

秋の歌

(一)

ゆるみ果てたる、琴の緒や
胸の亂れの音を、めつ
一葉に見ゆる天地の
秋の調べを歌ふべし。』

(二)

ふるさと遠く、父母ありと

忍ぶや如何に年月の
その素志まだ成らぬ
遊子の袖ぞ寒からし。

ともし火くらき閨の内
抱ける稚兒が行末の
榮、夢みつ且つ祈る
寡婦の袂將た如何に。

(三)

鳴立澤の物の哀れ、
足柄山の笙の恨み、
その男鹿鳴く嗟峨の里、
あゝ秋なれや、秋なれや。

こぼるゝ小萩、小夜ぎぬた、
野分の風の跡吊ひて
月に澄むなる虫の聲、
あゝ秋なれや、秋なれや。

(四)

馬立うまたて直なす更科さらしなの
麓ふもと小暗こくらきあかつきや、
川中島かんながしまの川霧かはぎりの
あとなく晴はる夕月夜ゆづきよ。

越こしの山々やま々々夜更よるけて
鶴か喉遠のどく落おつる時とき
星滿ほし天てんの霜しもに冴さえ
風聲ふうせい沈しづむ諏訪すわの湖うみ。

(五)

篝火かきりび消きえて風白かぜしろき
露ろ營えいに獨ひとり戟取こしとりて
萬里沙場ばんりさばを忍しのびたる
その將軍しょうぐんの面影おもかげや。
秋あきは來きたれり、おのづから
吹ふき來くる風かぜもいさぎよし、
馬うまに鞍くら置おけ、いざ然さらば

家の相傳の太刀を佩け。

年少かるも、老いたるも、

持場々々の備へせよ、

げに人生の戦かひは

いそしむ者に譽れあり。

見よ、桐の葉の旗じるし、

勇める色は野に餘る

薄の穂にもあらはれつ、

あゝ秋なれや、秋なれや。

我が情熱

雷に打たれて燃ゆる樹や
我が情熱は其のごとく、
悶え煩らふ方寸の
まどひの火焰いや燃えて、
静まりあへず暫しだに。

月、雪、花よ、戀よ、詩よ、
歌よ、情よ、樂の音よ、

雅趣皆な充ちて我れに足る、
たゞ革命の氣に餒えて
悶え煩らふ人の子の
悲嘆もするか斯くばかり、
雷に打たれて燃ゆる樹や
我が情熱は其のごとく。

歳晚幽思

(舊作)

『のふ母人よ今幾つ
 ねませば春の來るやらん、
 早く來よ來よ正月、
 凧を飛ばせて鞠なげて
 乳母に負はれて見に行かん
 あの伯父様の門かざり、
 のふ諸共に母人よ
 見に行かまし其の朝は。』

母の腕を枕にて
 ねもの語りの邪氣なく
 むつれし頃は聞の戸に
 北山おろし吹き荒さむ
 音牙ゆれども世の中の
 憂きは夜寒むは我れ知らず、
 たゞ凧糸のいとせめて
 長しと夜をぞ嘆ちけん。

今夜時雨る、雨の音
 いかにかに聞けとか遠寺の
 後夜告げわたる鐘さへも
 わけて哀れを交へたり
 草の庵に友はなく
 壁に背けるともし火の
 影に十年や二十年の
 過ぎ越し方ぞ浮びたる。
 世を觀ずれば幻ろしや、

心は夢の筐にて
 身は之れ罪惡の袋なり、
 あゝ浮草の根を絶えて
 昨日は東、今日は西、
 飛鳥の川瀬よどみなく
 誘ふ流れに漂らひつ
 やがて驚ろく今宵かな。
 元より脆き志ざし
 獨り崩るゝ霜ばしろ

立^たて直^なして来^こん年^{とし}は
 来^こん年^{とし}はとて暮^{くれ}を泣^なく、
 盧^ろ生^{せい}が結^{むす}ぶ邯^{かん}鄲^{たん}や
 粟^{あは}一^{いつ}炊^{すい}の夢^{ゆめ}まくら
 おほよそごとの何^い時^つとてか
 頼^{たの}めぬ人^{ひと}の世^よぞ辛^つらき。

我^われは願^{ねが}はず世^よの位^{くら}、
 我^われは望^{のぞ}まず人^{ひと}の富^{とみ}、
 門^{かど}に雀^{すずめ}の羅^らは張^はれど

背^せ戸^とに立^{たち}樹^きの椎^{しほ}もなし、
 樂^{たの}しむ節^{せつ}は幼^こな兒^この
 ゑみ綻^ほろべるたゞずまひ、
 羨^{うら}やむ者^{もの}は白^{はく}梅^{ばい}の
 雲^{ゆき}に撓^{たゆ}まぬ心^{こころ}かな。

鳥^{とり}は古^{ふる}巢^すに立^たち返^かへり
 花^{はな}はまた根^ねに歸^かへるとや、
 ふるさと遠^{とほ}き物^{もの}思^{おも}ひ
 しのぶ心^{こころ}に比^くらぶれば

かく生れ来て斯く渡る
 塵の浮世の旅ごろも
 さて脱ぎ捨て、歸るべき
 行くての空のなつかしや。

世を泣く人よ心せよ、

世は白萩の花の露

散らぬ程こそ風誘ふ

枝のうねりも辛らからめ、

世に倦む人よ心せよ、

世は一と夜さの旅の夢

さめては元の故郷や

樂しき園に春を見ん。

年を惜しめば涙あり、

春を望めば誰れとてか

ゑみの眉根を開かざる、

曇ると見るも月の影、

晴るゝと見るも月の影、

こゝろ一とつに晴れ曇る

浮世を雲の障りにて
ひとり更けゆく歲月や。

父母に別れて此の月日
身の貪しさや身を責むる
罪惡いと深き心より
晴れて樂しき新王の
春を迎へし折もなし、
あはれ幾世を存らへば
せめて苦しく耻多き

歳暮をだにしも脱るべき。

あゝ竹馬に任せても
幼な昔の故郷に
歸へり行くべき途もがな、
凧を飛ばせて鞠なげて
乳母に負はれて見に行きし
その門松の目のあたり
浮につれて我が袖の
露かあらぬか濕りたる。

笑つて歳を送くらんと
 思ふ心の幾歳か
 葛のうらみに返へりつゝ
 茲に今年も身の罪過を
 悔ゆるに暮るゝくやしさを、
 思ひあまりて味氣なく
 獨りし泣けばはらくくと
 またも時雨るゝ板廂
 身に沁む雨の音さびし。

凱旋門

そほ降る少雨夕晴れて
 十里の荒野人見えず、
 魍魅や啾く虫の聲
 尾花みだれて秋寒し。

はるかに見ゆる森陰は
 敵の屍の棄てどころ、
 此岡は味方の丈夫の

亡^なきがら籠^こむる新塚^{あらづか}や。

見^みよ、其^その森^{もり}と此^この岡^{おか}の

な^なか隔^へてな^なく跨^{また}がりて

沈^{しづ}む暮^ぼ雲^{うん}の空^{そら}高^{たか}く

立^たつ夕^{ゆふ}虹^{にじ}の大^{たい}緑^{りく}門^{かど}。

秋^{あき}風^{かぜ}樂^{らく}の音^ねにつれて

桐^{きり}の^{ひと}葉^はを打^うちかざし

凱^{かい}歌^か獨^{ひと}り唱^{とな}へつゝ

行^ゆくは平^{へい}和^わの天^{てん}使^しか、
鳴^な呼^こ、魔^まの神^{かみ}か、修^{しゆ}羅^ら道^{どう}の。

小米櫻

いとしの子等は熟睡して
 安き夢路や迎るらん
 今宵も半ば更けにけり、
 離室の方に彈き休みし
 妻がピヤノの一曲は
 想夫戀かや外國の。
 我れ唯だ獨り高樓の

書見に倦みて常のごと
 床に懸けたる名刀の
 鞘を拂ひて餘念なし、
 暮春のなごり、首夏の韻、
 漏遅々として夜静か。

こは底事ぞ殺伐の
 氣雲むら立つ劔の面
 誰れとは定か分かねども
 煮鮮やかに匂ひ濃き

亂れ焼夕の亂れく
浮ぶ美人の優さ姿。

幽、明、境ひを隔てたる
靈の現か幻ろしか、
悄然として物云はず、
うるむ眼元に情無量、
鬢のほつれも何と無う
憂れはしげなる其の状や。

空樓半夜燭暗らく
斷腸杜宇の聲ならで
外に語らふ者もなし、
唯だ見る雪の花笠や
瓶に挿したる小米櫻、
うつるは影か其の花の。
さりとは辛らし思ひ出の
胸痛みある春の夢、
春や昔しのそれならで

小米櫻の花壇に
見初めて馴れて初恋の
羞恥知りし其の昔し。

我れは壯丁二十、
妹は三歳か若かりき、
蛾眉婉轉の美は云はず、
世に薄倖の佳人あらば
世に俠骨の處女あらば
直ちに彼女に比らぶべし。

澎湃としてたゆたへる
太平洋の荒磯邊
近く怒濤をさしまねき
笑つて説くや『自由論』
妹が笑眉に滄浪の
鬱を忘れし幾度か。
鷺尾の峰の山狩りに
巢ごもる鷹の母を射て

慰さめかねつ妹が不興、
 涙を呑みて恩愛を
 語る心の琴の音に
 耳かたむけし幾時か。

かくても薄き戀ぢろも
 袖の時雨の晴れやらぬ
 妙子の妹が身よ哀れ、
 父母若うして世を去りつ
 友無し千鳥瀉を無み

夜寒む屢鳴く唯だ獨り。

我れ彌や増しに戀ひ寄れば
 彼れ彌や増しに打ち沈み
 戀に悶ゆるいぢらしさ、
 運命の手に閉ぢられし
 秘め巻物の夫れに似て
 讀むに讀まれず其の意中。

「ゆるさせ給へ」

戀の君、

君が愛情は

春の雨や

みのふし

うるほせど

つらさは

人の世の定め、

君に捧ぐる

胸はあれど

君に許さん

肌は無し。」

歸へる雁がね、来る燕、

知るや縁の糸共に

消息絶えて十餘年、

我れに妻あり、幼なあり、

鵬翼張つて天を摩すも

蝶意揚がらず夢戀々。

憐れむ妙子、君は今

いづこの誰れに身を寄せて
 いかなる態に世や経ぬる、
 いとし寵兒は有りや無しや、
 恙なくてか意を得てか、
 家は富みてか安くてか。

我れ將た恐る、妹妙子、
 辛らさ嵐に誘はるゝ
 桐の一片の葉がくれに
 世を傷むにはあらざるか、

今夜浮かべる汝が影の
 憂れはしげにも見えぬるよ。

別鳳離鸞時ありて
 逢へば戀しつ、戀へば泣く、
 泣いて別れて又終に
 太虚に歸へる夢の世や、
 あゝ戀せざれば泣かぬ人、
 涙惜しくば戀せざれ。

今昔の感極はまりぬ、
 こゝろ亂れて我れ知らず
 刀を拂へばはら〜と
 小米櫻の兩三枝
 脆くも散るや戀無常、
 夜森として哀れなり。

司馬天閣

身外求神轉亂神。

花紅月白白天真。

虛心放眼乾坤豁。

愛水愛山還愛人。

暮雲

北越客舍偶吟

一と日の業に疲れたる
 下界を訪ぶらふ天つ女か、
 浮世の今日の罪愆を
 數へほゝゑむ惡の魔か、
 暮天しづかに風湊ぎて
 浮べる雲の影一とつ。

うなだれ侘ぶる人の子よ、
 まばし憂ひの目を舉げて
 高く遙けく懐かしく
 身を忘れても仰ぎ見よ、
 天つ御空のふところ
 楽しく憩ふ夕雲を。

あゝ此の夕べ更衣月の
 雲まだ残る旅の臺、
 かの浮雲を眺めつゝ

今さらのごと最とゞ實に
 思ひ初めてき人遠く
 蒼穹に近き侶ありと。

且つ浮びては情無さを
 風に恕して屢々も
 且つ亂るゝや其の風情、
 且つ亂れても心安ら
 天に定むる其の行衛、
 好し、似たる哉、汝れと我れ。

盡つきせず濺そぐ我が袖そでの
 涙なみだの雨あめも乾かわきては
 登のぼりて汝なれに結むすぶらし、
 人ひとこひしさの遣やる瀬せなき
 その折を々の面おも影かげも
 誰たれれに求もとめん汝なを措をきて。
 汝なが通かよひ路ぢの絶たえ間まより
 希のぞ望みの光ひかり屢しば漏もれて

傷いためる胸むねも躍おどるなり、
 悶もたえ悶もたゆる詩しの魂たまも
 汝なれに向むかへばおのづから
 微び吟ぎんゆたかに天てんに入る。

乞こふ問とふ勿なれ塵ちりふかき
 俗ぞくに汚けがれし我が念おも想ひ、
 たゞ導みちびけよ永とこ久しに
 我われを招まねきて大おほ空ぞらや
 句こひは高たかく且かつ聖きよき

無限の國を仰べく。

暮るゝひと日や人の世の
憂さを、嘆きを、悲しみを、
戀を、迷ひを、喜悅を、
今はと斗り返り見つ
嗚呼、夕雲の名残り惜しう
峰のかなたに隠れ行く。

かぶら矢 畢

明治卅八年十一月十七日印刷
明治卅八年十一月二十日發行

かぶら矢

正價金貳拾五錢

郵税金四錢

著作
所
有
權

特東	特關	發	發	印	發	著
約海	約西	賣	行	刷	行	者
所地	所地	所	所	者	者	者
名古屋市本町三丁目	大阪市東區備後町四丁目	東京市日本橋區通二丁目十八番地	東京市本郷區湯島梅園町四番地	東京市牛込區市ヶ谷加賀町一丁目十二番地	東京市日本橋區通二丁目十八番地	東京市日本橋區通二丁目十八番地
川瀨代助	吉岡平助	裳華房	自然社	青木弘	芳野兵作	池亨吉

德川慶喜公題字。榎本武揚。宮本鴨北序文。犬養毅。島田三郎。尾崎行雄序文。栗本鋤雲先生著。栗本秀二郎編纂。

再版十一月三日來出

匏庵遺稿

菊判洋裝全壹冊
肖像眞蹟挿入
紙數七百餘頁
正價壹圓五拾錢
小包郵稅拾五錢

幕府の遺老を以て明治年代に異彩を騰げし者、之を臺閣にしては勝海舟翁あり、之を江湖にしては栗本匏庵先生あり、海舟翁の達識偉功もとより曠代の傑なるを失はずと雖も、匏庵先生の高風勁節、殊に企て及ぶ可からず。而して世人多くは海舟翁のみを浮慕し匏庵先生を説くもの寥々たるは何ぞや。蓋し先生、幕末多難の秋に際し身を奥醫より起して外政の局に當り、其偉績の録すべきもの極めて多し、一旦政變に遭ふや飄然として跡を江湖に收め、詩酒優遊自ら聖世の頑民を以て居り、絶えて聞達を求めず。而かも其學問該博、經史に涉り詩文を巧みにするのみならず、閱歷萬端、世故に諳熟するを以て其感想の溢れて文字の表はるゝもの勁拔雅健、趣味極めて饒し、本書は則ち先生の遺稿にして隨筆紀行より史傳、詩文に至るまで悉く収録せざるはなく、以て一部の幕末史に充つべく、以て一部の高士傳に充つべし、請ふ一讀して其言の虚ならざるを知れ。

東久世。福羽。黒田。高崎。松波大人題字
坂臣正先生序文。吳芳。溪先生跋文
三浦千春大人著。井出今滋先生校

製本十一月三日來出

萩園遺稿

菊判洋裝全壹冊
肖像眞蹟挿入
紙數七百餘頁
正價壹圓五拾錢
小包郵稅拾五錢

正々堂々旗幟を世に聳かして自から専門家と稱する人未だ必ずしも佳什名作に豊かなりとせず超然特立光を頼み跡を收め研鑽自ら樂む著者其人の如きは却て所謂専門家流をして後に瞠若たらしむるものなからんや蓋し著者は學殖富贍詞藻雅麗にして本居派より出て景樹派に近く巍然として自ら一派を樹立せり其歌文に堪能にして優に近代大家に伍するに足ることは斯道の耆宿たる八田知紀翁すら嘗て之を推重せられたりと云へるにて知るべし本稿の収録せる所は歌數千首文數十章を初めとして多種多岐に涉り雅に俗に莊重に戲謔に其の趣味の津津たる洵に欣賞すべきものあり下にしては國文學を修めんと志す人の階梯としても上にしては歌詞もて家を成しつゝある人の參考としても座右に缺くべからざる好書なり

△發行元 東京日本橋通二丁目(電話本局一千一五番) 裳華房

FLOWERS

增補 はな 四版

農學士

川上瀧彌先生 合著

和英作水彩畫 藤島武二君寫生畫 牧野富太郎君寫生畫 飯田雄太郎君寫生畫 一四版 一四版 八版 着色版

正價金壹圓五拾美錢 本全壹冊 (菊判洋裝美本全壹冊) 郵稅拾貳錢

花は自然の精華にして、造花の靈機之に萃る。而も詩人は唯其風姿韵致の美を歌ふを知りて、其構造組織の巧を究むるを知らず、科學者は只其構造組織の巧を究むるを知りて、其風姿韵致の美を歌ふとを知らず、嗚呼孰れか造化の靈機は、斯二者を合せて之を一とするに在るとを知らん、著者身を科學界に委ね旁ら文學を嗜み、久しく此缺陷を補ふに意あり、拮据數年漸く本書を成せり、敢て花の美と巧とを説き盡くし、造化の靈機を穿了すと云はざるも、庶くは文學と科學との調和之に由て啓かるるあらんか、圖畫の巧、印刷製本の美、書中の文字と相輝映するに至ては、必ずしも茲に繰述せず、一讀して其言の必ずしも浮誇ならざるを徴せよ。

初版再版好評嘖々の間に悉く盡き、今や増補改訂、挿畫を倍し以て第四版を發刊す、一掃して滿卷の芳色を掬せられよ。

宙外 藤寅之助先生序
山前 田次郎先生著

四季花曆 草木栽培書

(增補第貳版)

口畫着色石版圖 ● 草木圖
數拾個挿入 ● 菊版美本全壹冊
正價金四拾錢 郵稅金八錢

本書は著者が多年の好尚により、操觚の餘暇を以て、自から鋤鋤を執り、耕耘灌溉したる經驗に基づきて草木花卉の栽培法を説きたるものにて、此書一冊を繰げば尺寸の空間、掌大の盆裡と雖も、苟しくも土壤の存する限りは、自から培養し能はずといふ事なし。卷中數章に分ちて、地味の名稱性質、肥料の説明、挿木接木の法など、何人にも首肯し得るやう、丁寧平易に記述したる後、更に筆を起して、凡ての花卉を四季十二ヶ月の期節に分ちて、一草一木毎に、圖と文とを以て、其產地系統より、培養の順序繁殖の方法を記し、殊に詩歌俳句を挿入したれば、從來詩家名稱を知れども、形容を知る能ざりし、歌俳の詠題たるものは、一見掌を指すが如き物あり、然も此書は世間在來の園藝主が、乾燥無味にして、恰かも蠟を嚼むが如きの弊を避け、平易簡明なると共に、又一種机上の伴侶として、熟讀翫味するに足る物あり、畢竟著者が文筆の士たるを以て、斯の如き効果を奏したるに外ならず、同好の士試に繰讀せられよ。



兌發房華裳

農藝化學士 織田又太郎先生著

(增補第貳版)

農民の目醒

菊版美本全壹册
正價金參拾錢
郵税金六錢

本書は先生が多年農界のためにもせられたる農政農業經濟及び道徳に關する所論數十篇を訂正編纂し本邦農界警醒の資に供せんとして發行するものにして議論の卓抜なる文章の流麗なる農界稀に見る所のものなり今固先生に乞うてこれを上梓す苟も斯業界に志あるもの、必ず一讀せざるべからざるものなり其の目次を擧ぐれば

- 農界の危急●勸諭は人の美德なり●公義と公德と●地主の責務を論じ、併せて土地保護律發布の必要に及ぶ●嗚呼労働なるかな●須く土地の利用を圖るべし●農事調査の本旨を明にす●土地保護會の設立を望む●豐作を弔す●農民は奸商の餌食なり●致富の要道●農業經營難●労働は農家收入の一大源泉なり●經濟的模範農地に就いて●禍を轉じて福となせ●稻田被害地農民救助の一策●中等農業教育に就いて●偶感二則●消費問題を閑却する勿れ●府縣農會の職責如何●貧道十則

●發兌元

東京日本橋區通二丁目

裳華房



農學士 川上謙三郎先生 閣下
南高落松太郎先生 著

(最新刊)

農村時論

菊版美本全壹册
正價金參拾五錢
郵税金入錢

●意匠繪着色表紙寫眞版數葉挿入

題して農村時論と曰ふ、其内容果して如何。農村の衰頹は一國の國力、兵備、國民の氣風に如何の影響を及ぼすべきか。其衰頹の原因及び之れを救済する施設方法は如何。農村の前途に對して、吾人如何なる覺悟を要すべきか。是れ著者の大に意を致したる所。滿腔憂世の熱血凝りて此一篇の文字を爲せり。舉世滔々、商工立國說に雷同し、村落を棄て、都會に奔注する時に當り、毅然として農村問題を喚起するもの獨り本書あり。其議論の如何に勁拔雄健、時俗を警醒するに足るか、農界稀に見る所のものなり、一讀してこれを知れ。

●發兌元

東京日本橋區通二丁目

裳華房



三紫 味陽 宮安 崎藤 璋直 藏方 先方 生先 序著

小鳥と金魚

意匠畫着色圖參葉 ● 其他木版圖插入 ● 四六版美本
正金價貳拾五錢 (全壹冊) 郵稅金四錢

軒端の彩籠に玉を轉ずる如き美音を聽き、案頭の玉盤に金鱗の躍るを見る。世に娛樂の種類多くあれど、金錢を要すること少くして、何人にも得易きは、小鳥と金魚との飼養に及ぶものあらざるべし。さばあれ小鳥も金魚も、元生物なれば、猶ざりにして、其樂を受けうるべきにあらず。其飼養の方法宜しきを得ると得ざるとは、死活に關はるのみならず、天賦の美音も、自然の美容も、充分發達せざるものなれば、これが愛畜者は、一通り其心懸なかるべからず。凡樂は苦より生ずるものなれば、朝夕心を飼養に盡してこそ、其趣味も一層深かるべけれ。

本書は著者が多年の經驗に基づきて、小鳥と金魚との飼養法を、初心者にも解り易き様極めて丁寧平易に記述したるものなれば、一讀直ちに解得することを得べく、夏の朝、秋の夕、煩はしき渡世の憂さを慰むる便とならん、同好の士試みに一讀せよ。

裳華房發行

長田偶得君著

近藤重藏 間宮林藏

附錄(平山行藏)略傳

王師の樺太島を占領するや直ちに近藤岬シレット岬を重藏岬と改めまた樺瀬海峽を間宮海峽と稱するに近藤重藏、間宮林藏二子の姓名を紀念とする意に出づ二子北海經營上如何なる功勳此如き名譽の紀念を遺せる事蹟を知らんと欲する者は須く本書に就かざる文字の豪宕その雄壯と相副て一讀神飛躍る骨の概あり近藤重藏肖像挿入

▲金貳拾五錢 ▲郵稅金四錢

町田金三郎君遺著
新谷眞君校訂

將來之農業

菊判美本全一冊

正價金七拾錢○郵稅金拾錢

如何にして此振古未曾有の時局に應じ國家將來の大計を確立すべき此れ實に刻下國民の講究を怠るべからざる重大問題に非らずや本書は即ち此問題に向つて明確なる鐵案を下せる新著にして論據を農工商鼎立説に据え我國是のこゝに存せざる可からざる所以を闡明し以て商工業立國説の謬妄を打破し地主小作人の關係、農業經營の方針、土地勞力の經濟より農業保護干涉政策の得失に涉り縱横辯折眞に快刀亂麻を斷つ概あり農工商業者に論なく苟も國家百年の大計に留心する者は本書に就きて大に學ぶ所なかるべからず

發行元 東京日本橋 裳華房

山崎延吉先生閱
山田太一郎君著

理想之農村

菊判美本全一冊

正價金七拾錢○郵稅金拾錢

發刊後旬日ならずして無前の好評中に數千部を賣盡したる本書は今や江湖の渴求に應ずべく今や訂正再版漸く成れり苟も農村に關するあらゆる問題は評論細説して遺す所なく平易なる文字を以て健全なる理想の農村を描き出す而かも其理想や一派の學者が夢想する如き高遠達し難きものに非らず皆座して言ふべく起ちて行ふべき着實穩健のものたり業餘必讀の好書として農業家諸君に推薦するの僭越ならざるを得ず

▲第參版出來▼

發行元 東京日本橋 裳華房

志賀直道君序 岡田良一郎君序
大槻吉直君序 二宮尊親君著

報德分度論

菊版美本全壹册
正價金貳拾錢
▲郵税金四錢

分度を定めて浪費を節減し餘贏を儲衆して濟衆の資に供するに二宮尊德翁の興國安民の方法にして亦た道を行ふの本源也翁が委任されたる廢藩を興し衰家を復したるは皆な此の大道によらざるはなし翁の令孫尊親先生の遺業を繼承し現に北海道に在りて事業を經營せられつゝあり此の書は即ち先生が行餘の著作にして此の大道たる分度の原則より富國安民の主旨に至るまで反覆丁寧に解説せられたり今日の社會に在りては何人も坐右に備へざる可からざる寶典也

二宮尊親先生題字
吉田宇之助君著

(新刊)

二宮尊德報德要論

四六版美本全壹册
正價金貳拾錢
▲郵税金四錢

報德主義は二宮尊德翁が唱道實行せる富國安民の大法にして前人未發の政經也然るに世上の多くは此の深淵博大の旨を解せず之れを目して單に勤儉貯蓄を奨むるものとのみ思ふは誤れるも甚し著者之れを慨し此の大道の淵源する處を釋ね其の功用の偉なるを述べ齊家治國の大法は此の主義に在るを斷し筆端進る處時代の弊風を論じて痛快を極む世の經世濟民の志を懷くの人若くは報德の主旨を知らんと欲するの士は必ず一讀せざる可からず

勝安房先生題字
裳華房編輯部編纂

大増補
十四版

先哲座右之銘

四六判美本
洋裝全一冊
正價金三拾錢
郵税金六錢

曩に本書を發刊するや出版界空前の歡迎を受け江湖の喝采を博し版を重ねると十數回十三萬五千部を賣盡くし版本既に絶え久しく高需に背きしが今回弊房創業十週年の紀念として更に体裁を改め増補の上紙質印刷及び表装を精美にして實價を以て江湖に頒つこととせり收むる所の先哲教訓等百五十餘人の多きに上り近古三百年間に於ける風教道德の淵源此一卷に集る請ふ一本を供へて朝夕の修養となすべし

發行元

東京日本橋

裳華房

福羽美靜先生題言
裳華房編輯局編纂

訂正
第二版

家庭續座右之銘

四六判美本
洋裝全壹冊
正價金參拾錢
郵税金六錢

既に座右之銘ありて我が近代に於ける武士道の修養法を網羅せる上はこれと對して實業家の修養を示すものなかるべからず本書は則ち此の要求に應ずるものにして心學者及び富豪家壁書遺訓等を集め家内和合商賣繁昌の法より日常坐臥の掟に至るまで一々平易通俗の語を以て解き示し且つ圖書を挿みあれば座右之銘と并せ讀みて我が國力發達の由來する所を知り勤儉慈善の美風を培養する榮となすべし

發行元

東京日本橋

裳華房

近刊豫告

岡野知十先生著

東京本郷 自然社發行

○繪入 家庭年中行事

洋裝美本全壹冊
頁數凡參百餘頁

一年四季、月には月の式令あり、日には日の行事あり、舊制度廢せられ新式目いまだ立たざりし明治の革新も、こゝに四十にちかき年月を経て、舊制度舊行事の用ゐべきものは自然に復興し、さらに新制度新行事の加はるべきは加はり。朝廷より民間に及び、新年より歳暮に至るまでの行事、漸く整ひ來れり。著者のこの著あるは、一面には我家庭の清福清樂を加へんとするもの、參考に供し、一面には我風俗史研究の緒を得んとするにあり。且つ四季の季寄せを枕にする諸君子にありては、この書また『新式季寄せ』として材料を供することすくなからざるべし。

△發賣元

東京日本橋通二丁目

裳華房

收載する要目は(一)朝廷年中の御式(二)民間年中の行事、神佛の祭式等(三)家庭用四季の衣服、器具、食物、衛生の事項(四)花卉、蔬菜、果物、魚鳥の類、季節及び料理の献立(五)其他家庭用の四季に行はるゝ習俗遊樂等にわたるもの。

